



俳句雑誌[おき]

3月号

沖 発行所

林 相

能村 研三

水脈・山脈

寒 造 籬 青 々 と 仕 込 み 樽

權 入 れ の 歌 に 醸 せ る 寒 造

春 の 雪 残 響 す ぐ に 失 せ し か な

撓 む だ け 撓 み 水 面 へ 芽 吹 き 初 む

「沖」創刊四十周年と登四郎生誕百年を記念して「市川市文学プラザ」で開催された「俳人・能村登四郎の水脈」展が間もなく終了する。こうした企画展は、美術や文芸関係で、他の人のものはいくつか仕事としてきたが、今回は肉親として関わったので、いろいろな思いがありながらも、なるべく一人の俳人として冷静に見ていこうと思った。

「沖」の記念大会の参加者に配ることが出来た「凶録」の編集作業、全句集の刊行と共に「登四郎百年」の業績を検証するに相応しい仕事で楽しかった。期間中には、市川市内にある登四郎、翔の句碑めぐりツアーの案内役を務めたり、父を語る講演会などの関連イベントも開催した。それに、登四郎の誕生日に近い日に日頃から親しく付き合っている能村家の従兄弟たちがこの展覧会を見に来てくれて父の思い出話に花が咲いた。

ところで、今回の企画展のネーミングは文学プラザの学芸員である根岸さんがつけてくれたものだが、良い名前であったと感謝している。「凶録」の中で、私は「登四郎山脈」と

春灯一日のばしの事一つ

出張の直行直帰暮遅し

山笑ふ蛇腹折りなる予定表

畝糸にひかりを這はせ畑を打つ

画一な郊外店舗春寒し

斑雪山林相すで見えて来し

言う言葉をしばし使っている。これは、過去に「子規山脈」、「楸邨山脈」などと俳句の師系に使われていた言葉で、登四郎も弟子たちが自由に羽ばたいていくのを喜んで見送る俳人だったので、私も敢えて「登四郎山脈」という言葉を使うことにした。根岸さんからは、雑誌名が「沖」で海に関係するので「水脈」としたらという提案であった。

「水脈」と「山脈」は同じ「脈」の字を持ちながらも少しニュアンスは違うようにも思う。「山脈」という言葉には峨々たる山がしっかりと連なる景が浮かぶが、「水脈」という言葉からは、もつと自由で深い繋がりとといったものを感じる。登四郎の師系を語るには、やはり「水脈」という言葉の方が相応しいように思えてきた。

能村
研三



蒼茫集



列に蹤き

田所節子

煌々と月冴え風の磯馴松
義士の日や歩かう会の列に蹤き
輪飾を掛け高階の鉄扉
よちよちの児に蹤きゆける恵方道
朗々と歌留多を読み母卒寿
伴走の方が白息濃かりけり

去年今年

松本圭司

この星の表に今年うらに去年
初湯して肌元気な泡無数
老いてなほ華やかな人海老飾る
ふりむけば母のぬさうな手毬唄
松納め待ちて御霊が星となる
どんど火の中に昔のほのほあり

蝦蛄葉仙人掌

北川英子

天山もゴビも越えきし初メール
去年今年失意ゆるゆる遠ざかり
フレームに蕾ざかりの息じめり
雪折の生木が匂ふ逢魔刻
加湿器の青き灯寝息安くあれ
蝦蛄葉仙人掌なんとなく部屋の外

とんがつて

辻美奈子

とんがつてがんばつてゐる冬木の芽
新塔の灯も年守るひとつとす
頑丈な女で鏡餅据ゑて
ひとり居の母に裏白よく縮む
初夢のたのしみな子と眠りをり
日輪に雲のうすぎぬ寒波来る

弓 始 樋口英子

海国の気をひき絞り弓始
鷹匠の眼光鷹を正しけり
月冴えて五重の塔の軒の反り
深海の青さにも似て風邪心地
ちりちりと日差しがちぢれ干大根
石路の花海に没り日が燃え盛る

寒 晴 大畑善昭

次女一子挙げたり冬のうらら日に
畳の目なす浦波へ尾白鷺
起きて雪手の出しやうもなき程に
北東北綺羅なす雪を深くおき
つるつるの雪道誰も小幅の歩
明けの明星けふの寒晴確かにす

もういいかい 千田百里

しぐれ来るよと肩を摩りし母遠し
年つまるかの合唱を聴かばなほ

「もういいかい」畑の大根首浮かせ
毒草の枯れて葉草なりしかな
北風の六区や極彩色のきもの吊り
未帰還の魂かシベリア寒気団

海やまの 荒井千佐代

絵硝子を雨の打ちをり弥撒始め
海やまの闇を引き寄せ鏡餅
手をつながむと手袋を脱ぎにけり
獣喰ふ肥後恐ろしき手毬唄
ピアノまで天窓の日矢弾き初めす
凍て兆す被爆マリアの眼窩にも

去年今年 望月晴美

空き部屋も開けて師走の風通す
去年今年うねり自在の波頭
暁光に躍りだしたる初雀
師の在らば百歳を祝ぐ五日なり
はるかなるものに目の行く冬はじめ
お浄めのやうに初雪地を満たす

七連風 遠藤真砂明

マラソンへ手を振つてまた大根引く
網倉の大門も冬構

碇泊の数の船笛去年今年
読初や誌齡四十路の巻頭句
潮汲んで飾納めの船洗ふ
海光に七連風の高うねり

蟹歩き 藤原照子

一陽来復錠剤の床に跳ね
木枯や未知の高さへ塔・クレール
診断に五分の安堵や冬ざくら
喜寿なれや雪の坂道蟹歩き
蒼穹へ尖り谷川岳二日
凍鶴へ近づく歩幅つつしめり

浦波 安居正浩

浦波の音を添へたる大旦
七草や恋も挫折も遠くして
雪吊となる縄にある気負ひかな
金星に繋がれてゐる冬の月

裸木に電飾青き日暮来る
白障子ぴしりと過去を切り離す

素直に 吉田政江

鳥声の天かけ昇る恵方かな
初東風を真つ先に受け塔伸びる
初閨魔赤い飴玉もらひけり
楝や蔵書の芯に師の句集
蓮枯れて素直に風を通しけり
利根川を越え大寒と気づきけり

逸れ手鞠 久染康子

双峰の錠として滝凍つる
雪見舟景色だんだん重くなる
二つ三つ突いて戻しぬ逸れ手鞠
伊豆の湯へ一家丸ごと煤逃げす
柚子湯出て血管太くありにけり

青の季 千田敬

夢の字に「夕」あるふしぎ初みくじ
凍滝のうちに秘めたる青の季
風花や瞬を惜しめと師の声か

これがまあ後期高齢初鏡
寒椿紅一輪の桿気とも
冬日得て円空仏はゑみ給ふ

寒波来る 松井志津子

登校のまづ初氷踏む遊び
盆栽のしゆわと水吸ふ寒土用
灯台の益荒男立や寒波来る
曲り屋の土間の凹凸寒波来る
雪晴れや厨いきいき音のして
主逝く忘れ梯子のもがり笛

冬 桜 楠原幹子

海を見るむかし漁師のちやんちやんこ
大根を一本抜いてゆけといふ
鉄塔にいつか根の生え虎落笛
寒林を光が通り声とほる
林中に日溜りのあり笹子鳴く
つぶやけば妣がこたふる冬桜
安 否 宮内とし子
埋火やふつと安否を思ひをり

一人居の生活のけぢめ冬至風呂
真つ赤な実まつかなままに去年今年
新塔に未来ふくらむ初景色
枯るる中流れ急げる川一本
スイッチバックして寒林の細き影

雪 吊 鈴木良戈

雪吊の少し傾く陽の重さ
過去未来しかと隔てつ白障子
逝く年の影くつきりと力士の碑
孫嫁して膳一つ減る除夜の鐘
賛美歌を風に散らせつ社会鍋

華 甲 上谷昌憲

クリスマススイブの朝の梅昆布茶
三人の年寄りが守る初篝
国産と信じて受くる破魔矢かな
初晴やクレーンしづかに林立す
望郷の息吐く餅を焼きにけり
いつの間に過ぎし華甲や鏡割

潮鳴集

垂直に

内山花葉

放つておかれる気楽さ背高泡立草
ラ・フランス円周率は3として
木枯の夜のたましひは楕円とも
落葉松の空垂直に寒日和
獵犬の油断なき耳風花す

春よ来い

安藤しおん

この星の脈打つ起点初日燃ゆ
海蝕の崖かたぶけて鷹疾し
手作りの竹馬弾む希望の歩
梅東風や善意の連鎖国駆けて
行くほどに絵馬の断崖春よ来い

うれしき日

栗原公子

何事のひそみてをるや初曆
うれしき日の文字大きかり古日記
遠き日の一間あかるき歌がるた
うれしき日待つ冬薔薇まだ蕾
してみたきこと煤逃と鯨飲と

雪来るか

林昭太郎

ワイシャツの襟の固しよ雪来るか
山眠り賽銭箱に鍵ふたつ
夕茜ふゆの金魚にその水に
抱く嬰に眼鏡とられて冬温し
菜箸の糸で繋がり冬うらら



沖作品



能村研三選

鳩鳥の潜く葛飾すきごころ

千葉

上田 玲子

雪降りてはらからの幸つもるかな
針の穴とうに見えねど針供養
柚子浮かせ湯殿に満つる日の匂ひ
裸木しばし電飾の金縛り
手の平に髭の量感霜の朝
鳥声の空を統べをり木守柿
雨やみて石路の花いま日の器
極月や鞆の底に黒手帳
空と海のはざま一列干大根
一輪の花を見てゐる日向ぼこ
広かりし仮想空間むろの花
ふたおやのともにすこやか冬苺
盛り上がる冬の泉の力瘤
凍蝶の風に耐へゐていつくしき

岐阜

花田 心作

鶴見 遊太

潮さみを小夜曲として野水仙

埼玉

大石 誠

静電気逃がしパソコン事納
ひかへめな茶の花にある黄の主張
雪ぼたる旧知のごとく吾に寄る
己が分弁へてをり冬桜
トルソーや冬日はいつも斜めより
根を覆ふ苔のうねりや初時雨
入るに入れず出るに知られぬ蓮根掘
萩焼の底の薄紅初しぐれ
朴落葉五枚こはぜの十文半
リュックより文旦の出る下山バス
あご乗せて少し冷たき検眼鏡
夕暮のふいの不安や花終
煤逃や男ばかりの神田そば
寒夜読む佐藤愛子に湧く力

東京

能美昌二郎

五十嵐章子

沖作品 15句選評

*
能村研三

鳩鳥の潜く葛飾すきごころ 上田 玲子

「万葉集」の東歌に、

鳩鳥の葛飾早稲をにへすともその愛^なしきを外^とに立てめやも
という歌がある。上田さんのこの句も、万葉集のこの歌を踏ま
えての句であるが、鳩鳥はカイツブリで、水中に「潜く」習性
があることから、同音の「かづしか」に転じたと言われている。
「すきごころ」は古典的にも、「色好みの心」「風流な心」と言
う意味で使われる。先ほどの歌を訳すると「カイツブリのごと
く交いつづる葛飾の鳩鳥のごとく交いつづりますとも葛飾の早
稲を神に供える新嘗祭の夜は乙女として心身ともに清浄でなけ
ればいけないとはいえ恋人がきたら外に立たせたままなんてで
きるかしら」というようになる。作者の上田さんは書道でも師
範の免許を持つ方なので、こうした古典的な和歌にも日頃から

慣れ親しんでおられるようだ。「手児奈伝説」としても親しま
れている葛飾の地を身近に感じる作者の思いが描かれた句であ
る。

空と海のはざま 一列干大根 鶴見 遊太

この句、大根の産地としても有名な神奈川県三浦半島あた
りの風景であろうか。青い空と、青い海、そして畑の緑の絨毯、
そこに組まれた稲架に大根が干される彩のコントラストは美し
い。三浦半島の冬の名物は「割干し大根」。白いすたれ状に干
されたものがずらりと並び、風に吹かれゆらゆら揺れる。私も
以前写真でこの光景を見たことがあるが、海がすぐそこに見える
浜辺に、干される大根干しの作業は圧巻である。

ふたおやのともにすこやか冬苺 花田 心作

子供のころは、親のありがたさや中々実感出来ないものだが、
自分自身が大人になってきて、経済的な独立をすると、親を見
る目も変わってくる。自分が齢を重ねるにつれ、その気持が膨
らんでくる。まして、二親共に健在でいてくれることの幸せ感
が季語の「冬苺」に表れている。

静電気逃がしパソコン事納 大石 誠

今では私たちの生活になくってはならないパソコンだが、静電
気が大敵だそう。発生した静電気が、人体から電源ボタンや
機器の差込口からパソコン本体に流れる。静電気に対してはと
てもデリケートなもので、これを逃がす方法を考えなくては
ならない。年末の事務納めの季語も時代と共に大きく変わっ
てきた。

(以下略)